幻象画　（?）

絵夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻象画　（？）

【Ｎコード】
Ｎ５６２４Ｔ

【作者名】
絵夢

【あらすじ】
パリでの個展を終えた二人は、ケニア・ナイロビへ。
帰国し、仙台で新しい生活を始める。

フランス・パリでの個展からケニアへ、そして仙台での新しい生活

8、フランスにて

シャルル・ドゴール空港に降り立った二人を、パリの空はすっきりと晴れ、この季節にしては珍しく温かな光とともに迎えてくれた。

既に、イギリスでの過熱気味の報道を受け、何台ものテレビカメラが準備されていたが、主催者側の配慮により代表者だけによるインタビューが設定された。まさに、時の人と言う感じであった。

「テレビの画像を通してしか私は拝見していませんが、あなたの絵の素晴らしさは充分期待できるものだと思います。イギリスでの大成功の結果を踏まえて、今のお二人の心境をお聞かせください」

こうして代表インタビューは始まった。

「まず、イギリス、フランスの関係者の方々のこころ温まるご配慮その他全てのことに、この場をお借りして深く感謝申し上げます。ここフランスとイギリスは、憧れの地として、若い頃から訪れてみたかった国であり、今回のこのお招きにこころからお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます」

「わたしもイギリスでの多くの方々の身に余るおもてなしに接し、幸せでいっぱいでございます。ここフランスも若い頃何度かお邪魔させて頂きましたが、今回はこの人と一緒ですから、きっと全てが新鮮で印象に残ることと、今からこころトキメク思いです。お招き頂きまして、ありがとうございます」

「今後のご予定はのちほど担当者からご説明があろうかと思いますが、われわれマスコミ関係者としましては、ご自由にお二人の時間を愉しんでいただけるよう、出来る限り報道も差し控え、見守るような形で取材していきたいと考えています。充分にパリをお楽しみください。そして、町並みや近郊の風景など、もし創作意欲をそそられる所がございましたら、如何なる便宜も厭わない気持ちでい

ますので、遠慮なくお申し出頂きたいと思っています」
「温かいご配慮に心より感謝いたします。誇り高き文化と伝統の国フランスですから、どこを切り取っても絵になる風景ばかりでしょう。出来る限り多くの取材をしていきたいと思っています。いまから楽しみでワクワクしています。それに、まだこの人にも話してはいないのですが、ここパリでの十日間の個展が終了しましたら、帰国する前に、全てを忘れ、二週間ほどの休暇を取りたいと思っています。絵描きが休暇と言うのもおかしな話しではございますが、ゆっくりと、何の制約も予定もない日々を、この人と私にプレゼントしたいと思います。ロワール地方の古城を訪ねたり、そうですね、モンサンミッシェルへもぜひ行ってみたいと思っています。何卒宜しくお願いします」
「えっ、あなたって、うれしい……」
見る間に麗華の眼に光るものが溢れた。その一瞬はテレビカメラにしっかりと捉えられ『天使の涙』とフレーズが付けられて世界中に配信された。

「いきなりあんなこと言うんだもの、胸が詰まって……」
「感謝の気持ちをどう伝えようかと考えて、やっと思い付いたんだ。きみって宝石とか服飾にあまり興味なさそうだし、今のきみには、と言うより僕にも、二人だけのフランスの休日っていうのが一番いいのかな、なんて思ったんだ」
「ありがとう」
また涙で視界が曇って来そうであった。
「さあ、とにかく、明後日からの十日間、頑張ろう」
「ええ、今度は言葉もあまり解らないし、気疲れするかもしれないわね」
「でも、きみはインタビューの時、殆んど理解出来ていたんじゃないの？」
「少しはね。でもね、話すことは難しいのよ。なにせテキストで

のお勉強ですからね」

個展の十日間はあっという間に過ぎた。報道各社や美術館の配慮で混乱は起きなかったものの大変な盛況であった。

政府関係者、美術関係者、一般の人達と大勢の来場に連日二人は忙しく、そして、充実した時を過ごした。残念ながら、全ての作品はイギリスで買い手が付いていたため、予約のような形で今後数年は制作に追われることになる。

モンマルトルの丘に二人の姿があった。パリの休日を心ゆくまでお楽しみくださいということで報道関係者の姿も見えない。

有名なサクレクール寺院の前で二人は静かに会話を愉しんでいた。

「……幸せ……。幸せって本当にあるのね」

「個展なんかしていると、人と人との結びつきや縁の不思議さを感じることがよくあるんだ。初めて夫婦揃って会場に来てくれた友人の奥さんが中学校の同級生だったことが解って驚いたり、何年か前のことだけれど、一度作品を見て欲しいと思って、やっとコンタクトが取れた日本在住のイギリス人版画家に彼の個展会場であった時、その奥さんが高校の一年先輩でよく知っている人だったんだ。こんなことが重なってくると、もう偶然とは思うことが出来なくなってくる。きみと再会した時に思ったことは、広い日本の中のすぐ近くに、しかも同じような時に引っ越してきたのも、やっぱり、偶然なんかじゃなくて神様の意思なんだろうと。そう考えて初めて納得できることってたくさんあるんだよ。最初に僕たちが言葉を交わした時も、風があんなに強くなければ、バスが時間通りに来ていたら、もっと言うと、あの日あの時きみと擦れ違わなければ、あんなに親しくはなれなかったかもしれない。だからこそ、神様にこころから感謝する」

「あれは、ずっと前から話しかけようと思っていたから……」

「ありがとう。でも、冴えない高校生の僕に、周りの人達みんな

の憧れだったきみが話し掛けようと思ってくれたこと自体、やっぱり神様の悪戯だったんだよね」
「そうかなー。あなたはわたしのタイプだったからよ。でも、わたしも神様の存在は信じるわ。そう考えないと理解出来ないことっていっぱいあったもの」
「自分では一生懸命考えたり、行動したりしているつもりでも、所詮、神の大きな腕の中でじたばたしているに過ぎないと思うよ。全ては神の意思のままに動かされているんじゃないかな。そんな神がきみに巡り合わせてくれたのだから、この幸せに心から感謝しているよ。こんなに美しく、才能豊かで、優しい人と出会わせてくださいましてありがとうございますってね」
「あなただって、カッコいいし、しぶいし、絵は上手だし、背はちょっと低いけど、エヘッ。何より、心の中が綺麗だし、わたし達、ちょうどお似合いなのよ」
治安にあまり自信の持てない関係者が秘密裏に差し向けた警護官達が、近く遠くで所在無さを押し隠し、楽しそうに語り合う二人に、時折鋭い視線を向けていた。

「ちょっと聞きたいんだけど、いいかなー」
「いいわよ。なーに？」
「この前、ロンドンで純君には逢ったけど、もう一人の子、隆君だったかな、彼はいまどうしてるの？」
「えっ？　隆？　……彼はね、大学を卒業して、しばらくは東京で高校の教師をしていたのよ。でも、今は、青年海外協力隊員になって、アフリカのケニアにいるそうよ」
「へーっ、凄いな。純君も今年中にはニューヨークに留学したいって言っていたよね。やっぱり、きみの子供達って世界に羽ばたくように育ったんだね」
「どうかなー、わたし自身は、これからの人は、日本だ外国だっていう時代じゃないって思ったし、テレビのお仕事なんかで外国に

行く機会が多かったのよ。そんな時よく一緒に連れて行ってたから、あの子達って、案外気軽に外国に行かれるんじゃないかしら」
「そうかもしれないね。これだけ情報手段が発達して、アフリカや南アメリカの出来事なんかでも、殆んどリアルタイムで伝わってくる時代なんだから、その分、考え方も世界的になっていくんだろうね。それで、いま、隆君が活動している場所って判っているの？」
「ナイロビから車で四時間ぐらいのところにある小さな村にいるって、純が言ってたわ。そこで、やっぱり先生をしているって」
「……帰りにそこに行ってみようか。きみも随分長い間逢っていないんだろ？　僕も彼に逢ってみたいし」
「あなた……」
突然のことに、終わりの方は言葉にならない。
「行こうよ。少し寄り道をすると思えばそんなに大変なことじゃないさ」
「本当にいいの？」
「よし、善は急げだ。これから旅行社に行って相談してみよう」
目頭に涙を滲ませた麗華は、顔一杯に笑みを浮かべると、昌幸の腕を抱え込んだ。

9、ナイロビにて

二日後、ケニアの首都、ナイロビの空港に二人の姿があった。
昌幸は大きく伸びをしている。
「来たよ。ここがケニアだよ。アフリカなんだよね。前には想像したこともないような場所にいま、きみと自分がいる。とても信じられないような気がするよ。あ、きみ、大丈夫？　疲れていない？」
「ありがとうあなた。隆に会えるって思うと、疲れたなんて言っていられないわ。あなたこそ大丈夫？　海外旅行なんて初めてですものね」
「一人で来たとしたらやっぱり疲れてホテルで寝込んだりしたか

もしれないけれど、きみと一緒だから、全然疲れなんて感じないよ」
「でも、これから車で四時間以上もかかるのよ。どこかで少し休んでから出発しましょうよ」
「いいよ。きみさえよければすぐに行こう」
「あれだよ、あそこ学校だよ。ほら、子供がたくさん遊んでいるよ」
「……」
村に入った辺りから麗華の表情が硬くなり、言葉も少なくなってきた。
学校の前で車が停まった。日本人が珍しいのか、子供たちが駆け寄ってくる。ひとかたまりになった人垣の向こうに長身の青年がいる。日本人のようだ。ゆっくり近付いてくる。
「……お母さん？　……どうして？……。」
青年は驚愕の表情を浮かべた。
「……隆」
駆け寄る麗華の口から言葉は出ない。見る間に涙が溢れた。
「……」
「……」
「ごめんね。お母さんの我が儘で」
「いいよ。ちゃんと理解してるよ。それよりどうしたの？　こんな遠くまで。あ、あの人、二階堂さん？　じゃあ一緒に来たの？」
「そうよ。あの人が是非行こうって言ってくれたから。ロンドンで純にも逢ったのよ」
「初めまして、隆です。母がお世話になっています。それに、こんな遠いアフリカまで来てくださってありがとうございます」
「あ、二階堂です。初めまして。わたし達のことでは本当に申し訳なく思っています」
「あの頃は腹を立てたり憎んだりしたこともありましたが、今では、自分なりにきちんと理解しているつもりです。そんなことより、

ここでこうして母に会えるなんて、夢のようです。嬉しくてたまりません。ありがとうございます」
「いえ、ちょうどフランスからの帰りだったので少し寄り道をしただけで……、えっ、あの子達って、日本語か英語が解るのですか？」
「たまには遊びの中で単語を教えたりするのですが、まだ駄目だと思います。英語も始めたばかりですし……、お母さん……」
話しながら麗華の姿を眼で追っていた昌幸と隆に驚愕の表情が浮かんだ。楽しそうに子供達と話し合っていた麗華は、今度はその父兄と思われる人たちと話している。
「きみは……」
「お母さん、スワヒリ語解るの？　話せるの？」
「えっ、話せないわよ。いまの言葉ってスワヒリ語なの？　知らなかったわ」
「じゃーどうやって？」
「ああ、そのことね、ちょっと待って。あとでゆっくり話してあげるわ」
悪戯っぽい笑みを浮かべ麗華は言った。

隆の宿舎に入り気忙しく質問を投げ掛けようとする二人を前に、
「ちょっと待って、いま整理しながら説明するわ」
麗華は、ゆっくりと話し出した。
「……わたしね、言葉ってただの記号だって思うのよ。意思を伝えるための記号に過ぎないんじゃないかなって。だから、記号なんて使わなくても、心で聞いて、心で話すことって出来ないかなって思ってたの。ほら、『目は口ほどにものを言い』って言葉があるでしょ。原始時代の人達だって、言葉が生まれる前でもちゃんと意思の疎通は出来たって思うわ。本当は、みんな生まれながらにして言葉なんか使わなくたって意志を伝える能力を持っているに違いないってずっと考えてたのよ。だから、さっきの子供達との会話は、心

と心で話したって訳よ。子供達は純粋だからそんなに苦労はしないけど、親達はやっぱり少し難しかったわ。でもね、そうやってると、不思議に記号も口から出てくるのよ。隆の時だって言葉を覚える前からあなたの考えること、思うことちゃんと解ってたし、昌幸さんとだって、最初にお話しした時も、本当はそのずっと前から、眼と眼で会話してたのよ、道で擦れ違う度に。だから急にあんなに親しくなれたって思ってるわ。お別れした後でも、ブラウン管を通して時々意志は通じてたでしょ」

「……お母さん」

「……うん、今言われて気がついたんだけど、時々きみと話していたように感じて不思議に思ったことがあった」

「隆の前だから言うのがちょっと恥ずかしいんだけど、どうしようもないほど疲れて、楽屋でボーッとしてた時なんか、いつも、あなた助けて、ここから連れ出してよ、って一生懸命あなたに呼びかけてたわ。でも、疲れている時ってそんな力も弱いみたいね」

「そう言えば、一度だけ心の奥の方が変に落ち着かなくて、何とかしなくちゃって、訳も解らないのにしきりに思ったことがあった。それが何で、どうしたらいいのかは結局解らなかったけれど」

「わたしって、いま、あなたと一緒にいて、凄く精神的に充実してる、それに安定してる。そうすると、そういう能力ってパワーが上がるみたいね。あまり苦労しなくてもちゃんと子供達と話すことが出来るんだから」

「きみって……」

その夜は隆の宿舎に泊まり、翌日の昼頃帰途につくことにしていた。

「何か困っていることない？　足りないものない？　ちゃんとお食事は摂ってるの？　あと何年ここにいるの？」

やはり麗華も母親であった。苦笑いを浮かべながら、隆は、

「一応あと二年ってことだけど、そのあとは、アフガニスタンに

行こうと思っている。でも、ここが終わったら一度帰国するから、その時は連絡するよ」
「きっとよ。待ってるから」
「元気でお帰りになるのを待っています」
「ありがとうございます。母を宜しくお願いします」
こんな挨拶を終えると、心残りを断ち切るように車は走り出した。ナイロビに向けておよそ四時間の長いドライブである。

「たくましいな。彼の若さがうらやましいね。でも、本当に素晴らしい青年に育ったね。純君に会った時も思ったんだけど、世の中の青年達がみんな彼等みたいな若者だったら、きっと世界中に平和が満ち溢れ、住みやすくて温かい地球になるんだろうね。きみの子供たちに会ってみて、何か心を洗われるような清々しい気持ちになった。あらためて、きみの温かくて愛情深い人間性に感動を覚えるね。子供を見れば親が判ると言うけど、その通りだと思ったよ」
「あなた、こころから感謝してるわ。ありがとう。わたしだって隆があんなに立派になってるなんて知らなかったわ。それにね、人間性って言っても、わたしはあの子たちを愛しただけよ。そんなのどこの母親だって同じじゃない？　ただ一つ違うって言えば、小さい頃から外国をたくさん見せたってことかしら。わたし、そんなことぐらいしか思いつかないわ」
「愛情豊かな子供は、愛情豊かな親から生まれる。逆に言えば、愛情豊かな親からしか愛情豊かな子供は生まれてこないということなんだろうか」
「親の愛情って何の打算もない、最も純粋な愛情だと思う。子供を助けるためなら自分の命をも差し出すって動物達の世界ではよく見るじゃない？　人間も同じなのよ」
「そうなんだろうね。日本からロンドンに向かって飛び立った時から一月以上になるけど、その間、きみから人として大切なことをたくさん教わった気がする。これは本当にそう思っている。それに、

今言われて気がついたのだけれど、僕のきみに対する愛情も、純粋な何の打算もないものだと思うんだけど」
「そうよね。わたしだってあなたには心から純粋な愛情を持ってるもの」
二人の愛情談義を乗せて、車は一路ナイロビへの道をひた走っていた。

夕刻、ホテルに落ち着いた二人は部屋の窓から、雄大なアフリカの大地に沈もうとしている太陽を見ていた。
空、雲、木々、見詰めている二人の顔、眼に映るもの全てを茜色に染め、ゆっくり、しかし確実に沈んでゆく。日本で見るより数倍も大きく感じる巨大な夕陽。強烈なエネルギーを浴びせ掛けられている様だ。美しく、そしてあまりにも圧倒的な迫力に会話はない。言葉で表現するよりもっと大きな感動を握り合った手で伝えあっていた。お互いの心に直接触れ合うように様々な感情が交わされていた。
やがて巨大な太陽は、静かにその全身を地平線の彼方に没した。直後のめくるめく残光の美しさは、厳かで神秘的な感じさえ与える。神々しさに身体中が震えるようだ。妙に握り合った手が汗ばんでくる。ふと目をあわせた二人は、微笑みあうと、今度はじっとお互いを見詰めあった。いま、目の前で繰り広げられた大自然の現象の余韻をいとおしむように、しっかりと心のキャンバスに刻み込んで。

およそ一月以上にも亘る長い旅行を終えた二人の姿が機内にあった。
「今後どうする？　どこかで家を借りようか」
昌幸と麗華の状況を考えれば、小さな家を買う事ぐらいは出来るのだが、借りるという発想が直ぐに浮かんでくる所が彼らの人柄であろうか。
「ええ、わたしは、いつもあなたと一緒ならどこでもいいわ」

「山が好き？　それとも海？　田舎？　都会？　色々な選択肢があるけど、きみが住んでみたいと思っているようなところはどこ？」
「そうね、あなたの絵のお仕事があるから、どこかの地方の、交通の便利な都市にしましょうよ」
「うーん……。じゃ、あまり家賃が高くなさそうで、気候的にもそれほど厳しくない地方都市ってことで、僕が前から住んでみたいなと思っていた、仙台はどうかな」
「いいわ。わたしも何度か行ったことがあるけれど、あの街好きよ。賛成。それに、仙台ならお友達が一杯いるから帰ったら聞いてみるわ」
こうして二人の新生活は、東北・仙台市でスタートすることになった。

１０、新しい生活

彼らが帰国して一月が過ぎようとする頃、ようやく二人だけの静かで、落ち着いた生活が始まった。三十年以上待ち望んだ生活であった。
麗華の友人が見付けてくれた貸家は、市内より少し離れた閑静な緑の多い住宅街の一角にあった。三年前まで私塾に使われていた二十畳ほどの洋室と八畳の和室、六畳のダイニング・キッチンという、こじんまりとまとまった小さな一戸建てであった。何より、蔦に覆われた外観の佇まいが麗華の気に入ったようだ。
同じ敷地内に少し離れて大家の老夫婦が住む母屋があり、こちらも年月の割にはよく手入れされ、そこで暮らす人の人柄を忍ばせている。細々とした事を丁寧に教えてくれた老夫婦は、もちろん二人が最近テレビや週刊誌を賑わせた事も、麗華が人気歌手であったことも知っていた。しかしそんなことには何も触れず、優しく接してくれた。ご主人は、小学校の校長を最後に退職され、夫人も永く教職に就かれていたということであった。退職後この離れを建て、近

くの子供達に共働きの親が帰宅するまでの時間、勉強を教えたり、遊ばせたりして使っていたが、五百メートルほどの所に公設の児童館が出来たため、この離れは役目を終えたという話を、教育者らしい要領のよい語り口調で聞かせてくれた。既に結婚された一人息子は、五年ほど前からアメリカ・シカゴで働いているとのことであった。

麗華の実家から運んだ少ない引越し荷物を置くと、二人は町に出かけ、当面必要な家財道具や日用品などを買い求めた。

室内にお気に入りのソファーをセットし、カーテンを吊り、買ってきたばかりの荷物を整理し終えると、二人は、お互いが大切に持ってきた『大辞林』を本棚に並べた。表紙の色が長い年月を物語っている。昌幸の傍らに麗華がそっと寄り添っていた。辞書と同じように。

鉢植えの花を飾り、ようやく新居らしい雰囲気を整えた。室内を眺めながら、昌幸は大きく息を吐くと言った。

「やっとここまできたね。色々あったけれど、もう何十年もここできみと一緒に暮らしているような気がする。決められた位置に収まって落ち着いたような気もするよ。やっぱり、この世に生命を与えられた時からこうなるように運命付けられていたんだと思う。ここで、凄く照れくさいけれど、思い切って言ってしまう。僕は、きみの事をこれから先、生命ある限り大切にしていくことを誓います。冗談なんかじゃなく、心の底からそう思っている」

「ありがとう。わたしの方こそあなたに誓うわ。これからはあなた一人のことだけを考えて、最後の瞬間まで、あなたとわたしが幸せだったと思えるように頑張って生きて行きます」

「何もあまり頑張る必要はないんだけどね。今まで通りでこれ以上ないほど幸せなんだから」

「そうね、あまり力を入れすぎると疲れてしまうわね」

「あ、そうだ。前から一度聞きたいなって思っていたことがある

んだ。いいかなー」
「いいわよ。はい、何でも聞いて」
「昔のことなんだけど、二十五年ぐらい前、テレビ番組で、確か『スター初恋談義』って言ったかなー、とにかく、そんなのがあったよね」
「ええ、でもあんなの見たの？　へーっ、結構ミーハーなとこあるんだ」
「いや、殆んど見たことなかったけど、新聞のテレビ欄にきみの名前が出ていたから、つい気になって。あの時、きもの相手は誰だろうと思っていたら、全然知らない人だった。あの人って？」
「いやーね、あんな所にあなたを引っ張り出すわけにはいかないじゃない。あなたの事は、そっと胸の奥に仕舞っておきたかったから、所属していた事務所に頼んだのよ。でも、あの時、ずーっとテレビカメラを通して、テレパシーを送ってたわ。ごめんね、本当はあなたなのよって」
「そうだったんだ、ありがとう。僕もあの時のきみの瞳が何か少し悲しそうに見えたりしていた。でも温かい光のようなものを感じたり、変な気分だったよ」
「あんなこと、そんなに気にしてくれていたなんて、やっぱり嬉しいわ」
麗華の瞳が少し潤んでいるように見えた。
「わたしが二十二歳だったお正月、あなたと実家の近くで擦れ違ったでしょ。あの時、あなた、可愛い女性と一緒だった。悲しかったわ。お正月から一人で泣いたのよ。でも、その直後から急に忙しくなってしまって、自分で何かを考える余裕がなくなってしまって、それで何とかやってこれたんだわ」
「すまない。僕もあの時は辛かった。職場の社長の娘さんで、少し付き合っていたんだ」
「テレビのお仕事やコンサートなんかもたくさんあって、コンサートって言えば、いつもあなたの姿を探してた。ばかみたいに。ど

んな大きなホールだって、あなたがいれば絶対判るって自信があったのに。でも、一度も来てくれなかった。淋しかったわ」
「行きたかったよ。近くの文化会館でコンサートがあった時は窓口まで行ったんだ。でも、遠くからでも逢えば益々辛くなると判っていたから、どうしても中に入れなかった。だから、僕とは別の世界の人だから、思い出だけを大切にしようと無理矢理納得して、テレビできみを見て頑張れってエールを送っていたんだ」
「もういいわ。いまこうしているんだから。もう二度と言わないわ、あの頃のことは」
二人は、お互いを見詰め合うと、そっと唇を合わせた。
「どうする？　今晩一晩くらいここでこうして、お互いの眼を見詰め合っていようか」
「ダメよ。まだまだ先が長いんだから。身体でも壊したらどうするの。でも、もうしばらくこのままでいさせて」
二人にとって満ち足りた、幸せな生活はこうして始まった。

庭先に植えられた大きな柿の木に小鳥たちが挨拶に来る。
朝の目覚めは最高であった。今日も天気はよさそうだ。まだ名前を知らない山並みが柔らかな日差しを浴びて輝いている。昌幸は大きく伸びをすると、思い切ってカーテンをさっと開けた。隣のベッドに麗華の姿はない。台所から綺麗なハミングに乗って、モーニング・コーヒーの薫りが漂ってくる。トーストの焼ける香ばしい匂いも混じっている。昌幸は飛び起きると台所へ急いだ。
「おはよう。いいよ、そんなこと僕がするから。きみはもう少し眠ったら？」
「何言ってるのよ。これはわたしのお仕事よ。それに、こんなにお天気がいいんですもの、もったいなくて眠ってなんかいられないわよ」
「じゃ、洗濯とそれを干すこと、畳んでしまう事、あと、お風呂の掃除と沸かすこと、もう一つ、食事の後片付けは僕が担当するよ」

「いいわよ。最初に甘やかすと後が大変よ」
「でも、手分けしてやれば早く片付くし……」
どこまでも仲がいい二人であった。
「ねえ、本当にあなたにお洗濯なんかお願いしていいの？」
「任せてよ。きみの下着なんかは、外から見えないように上手に干すから」
「バカねーっ。下着は、わたしのもあなたのも、もう洗って浴室に干してあるわよ」

毎朝ベッドを出ると二人は近くの公園まで散歩に出かける。ここに住むようになって三ヶ月、ずっと続いている習慣である。途中で擦れ違う人たちとも次第に顔見知りになる。
「おはようございます」と気軽に声を掛け合う。そんな気持ちのいい散歩を楽しんでいた時、麗華が言った。
「ねえ、最近ね、擦れ違う人達の事なんだけど、最初の頃に較べると、ご夫婦で歩いていらっしゃる方が増えたって思わない？」
「そうだよね。僕も何か変わってきたなと思っていたんだ。そうか、夫婦二人連れが増えたんだ。でも、どうしてなんだろうね」
「わたし達に刺激されたんじゃない？」
「どうかなー。そうかも知れないね」
二人にはよく理解できないことではあったが、地域の人たちの心の中に、温かで優しい風が吹き始めたようである。

「ねーっ、あなた見て見て、綺麗よ。大家さんにお正月に飾ってって頂いたのよ」
麗華は何か花束を抱えている。
「何？　それ」
パレットから残った絵の具を剥がしていた昌幸が振り返って言った。
「菊の花と南天よ。お正月の定番よ」

「でも、その南天、まだ実がついてないんだね」
「嘘よーっ。こんなにいっぱい付いて……。えっ？　あっ、ごめんなさい。あなたには……」
昌幸の目には、南天の葉の緑に溶け込んで、実そのものは全く捉えられていない。
「いいよ、謝る必要なんかないよ」
手を休めた昌幸が近寄ってその花束を手に取り、見詰める。
「こうして近くで見ると、その形や艶なんかの差で実があることが判るよ。いやだね」
殊更明るい声で言った。
「ごめんね。よく理解しているつもりでも、やっぱりダメね」
「気にしなくていいって。その分、菊の花なんかの色はしっかり認識できているんだから」
「……でも」
「ずっと前、思ったことがあるんだけど、眼の不自由な人の場合は、眼をしっかり閉じて歩いたり、動作をしたりすれば、健常者にもある程度感じることが出来る。耳の不自由な人の障害も、やっぱり、耳栓をするか、イヤホンで大きな音を流して話し掛けたりすれば、疑似体験できる。その他、手や足の不自由な人達の、と考えると、ある程度の障害を持つ人のことは少しは体験できるんだね。でも、色覚に障害のある人のそれは、サングラスをかけると、別のしっかり認識できている色まで影響を受けてしまう。こう考えると、この色覚障害と言うのは結構始末が悪いんだ。正常な人には体験することが出来ない障害なんだね。今までの信号機では、青がよく識別できなかったのだけれど、今設置が進められている発光ダイオードのそれは、よく判るようになっている。でも、今度は、僕の場合は特に、黄色と赤が全く識別できなくなってしまった。だから、青じゃなかったら道路は横断できないんだ。まあ、近寄れば光っている信号の位置で判るんだけどね。それに、僕のような強い傷害じゃなく、軽い色弱の人が殆んどだと言われているし、普通の社会生活

を送るのには全く不自由を感じない障害なんだ。ただ、僕のように絵が一生の仕事と思うと、こんな悔しい、不自由な障害ってないんだ。それに、これって慣れるってことはないんだよ。自分で工夫して、それと、色なんかの選択は神様にお任せするようになって、どうやら人に評価される絵が描けるようになったけど、今でも、発表する時は心の奥底では恐い気持ちが強く渦巻いているんだ」

「……」

「まだ絵に興味を持って描き始めたばかりの頃には、耳に障害を持った音楽家だって活躍しているんだから、僕も頑張らなくてはいけないと考えたんだけど、悔しくて悲しくて、何度も筆を捨てようと思ったことがあったんだ」

「……そうだったのね。その話しを聞いてて今やっと解ったわ。わたしが凄く落ち込んで声もスムーズに出なくなったり、しきりに歌のフレーズを間違えたりしたことが何度もあったのよ。あれって、きっと、あなたが筆を絶とうって悩んでいた時なのね」

「そうかもしれない。きっとそうだと思うよ。耳に障害を持つ作曲家は、ピアノの鍵盤や特殊な楽譜が、若い頃の僕の場合は、絵の具のチューブに貼ってあるラベルが唯一の道案内だったんだ」

「じゃー誰かが悪戯して全部のラベルを滅茶苦茶に張り替えておいたらどうなったの？」

「きっと出鱈目な色の作品が出来上がっただろうね。それで、個展なんかで恥をかいて、一切絵からは縁を切ったと思う」

「そうしたら、わたしとの再会はなかったのね。よかったわ、あなたにそんな意地悪なお友達がいなくて」

「そんな奴、友達にならないよ」

麗華と一緒に暮らし、また、題材も、イメージも色も全てを何かの意思に任せて描くようになった今、昌幸は、自分の色覚障害を殆んど意識することはなくなった。だからこそ、明るい口調で話すことが出来るのかもしれない。

二人が仙台で一緒に暮らし始めて、やがて一年が経とうとしていた。
「今日ね、涼子が来るんだって。お友達を二人連れて来るって言ってたわ。あなたどうする？　絵に取り掛かる？」
散歩から帰って朝食の仕度をしながら、麗華が言った。この言い方は明らかに一緒にいて欲しいと言っているようである。彼女の心のうちを察して、
「いいよ、僕もお相手するよ。で、何時頃って言ってた？」
「ありがとう。十一時頃だって。じゃ、わたし朝食が済んだら、クッキー焼くわ」

１１、新しい友人たち

「元気？」
玄関で大きな声がした。後に男の声も聞える。涼子達が到着したようだ。
「どうもその節は色々お世話になりまして……」
もごもご言いかける昌幸に、
「もう、堅苦しいことはいいの。それより、少しは落ち着いた？　長い間待ってた新婚生活はどう？　まっ、聞くまでもないか。表情を見れば判るわね」
「よしてよ、新婚だなんて。もう二人とも五十代なのよ」
涼子の連れてきた男たちがやや上気した顔を見合わせている。
「……そうなんですよね。でもとてもそんなふうには見えないですね。信じられないです……」
「でしょ。この子、歳とらないのよ。それより年々若くなっていく不思議な子なのよ。私が見てる限り、ご主人と再会してから、急に輝くようになったしね」
「いいわよもう。それより、その方たち紹介して」
「その前に中に入って頂いたら」

「あ、ごめんなさい。少し狭いですけどお入りください。どうぞ」
男たちは親しみの篭った、そして、憧れにも似た眼差しで麗華に会釈すると、応接間兼アトリエに入った。
「まず、このお二人を紹介しましょうか？　と言ってもあれだけテレビや週刊誌で騒がれたから、よく知ってるわね」
「ええ、よく存じています。特に奥様はお若い頃からテレビでお目にかかっていましたから。じゃ、自己紹介ということで、私から。竹之内信二と申します。物書きです。下手な小説を書いています。5年程前、ちょっとした盗作騒ぎがありまして、その時、涼子先生に助けて頂いて、それ以来のお付き合いです。きょうは、話題の人達にお会いすると伺って、厚かましく付いて来ました。宜しくお願いします」
「山口健司と言います。涼子先生と同じ弁護士をやっています。と言いましても、まだ四年目ですが、所属している遠藤法律事務所で可愛がって頂いています。宜しくお願いします」
竹之内はちょうど四十歳、山口は三十二歳ということである。
「竹之内さんはどんなものをお書きになるのですか？」
「はい、主に時代物です。それも、江戸時代の侍の話なんかが多いです。名刺代わりに何冊かお持ちしましたので、お暇な時にでもお読みください」
「あ、ありがとうございます。私も絵の素材として、源義経などには興味がありまして、昔調べたことがあるのですが、江戸時代のこととなると全く判りません。お書きになる時には、やはり、たくさんの資料を集めることから始められるのですか？」
「他の作家の方なんかはそうしておられるようですね。でも、私の場合は学生の頃から集めていましたので、今は改めてそんなことはしていません。それに、今お渡しした本をお読み頂けば判っていただけるのですが、ちょっとしたエピソードと言いますか、出来事を思い切り大きく膨らませて書いていきます。つまり、出来事はノンフィクションで、物語は完全にフィクションなんです」

「そうしますと、私の絵と似ているのですね。モチーフは実際の風景や、それを多少アレンジしたものですが、全体の作品としては、それを幻想の世界の中で描いていくのです。特にここ数年の作品は、原風景を殆んど意識してはいませんが、以前の作品は、構想を練るところから初め、自分の意志とセンスを頼りに筆を進め、次第に無意識で筆を動かす、そんな具合に描いていました」

「なるほど、それで二階堂さんの作品に親しみを感じるのでしょうね。お話しを伺って、謎が一つ解けた様な気がします」

「ご存知かどうか判りませんが、私の作品に源義経三部作があるのですが、彼、義経の時代などに興味はお持ちではないのですか」

「私も物書きとして興味を持っているので以前調べてみたことがありますが、あの時代は資料が非常に少ないですね。その分勝手に書くことが出来るという面白さはある反面、時代考証の難しさが付きまといますね」

「確かに、おっしゃるようにあまり事実に反することは書けませんね」

「代表的な資料としては『吾妻鏡』、『源氏物語』、『源平盛衰記』ぐらいなんですね」

「その『吾妻鏡』は頼朝側の資料ですから、義経に付いての記述は少ないですし、『源氏物語』や『源平盛衰記』はフィクションですよね。あと、細々とした古文書などは幾つかまとめられていますが、『吾妻鏡』との矛盾点が指摘されたりして、何を何処まで信用したらいいのか、私達には判断がつきません。あ、それと、『外津軽三郡史』というのがありますが、これもその信憑性に疑問がありますよね」

「二階堂さんは、義経三部作をどうやって描かれたのですか？」

「わたしも知りたいわ」

と、麗華。

「……ご存知だと思いますが、私は、赤、緑、茶の三色が殆んど見分けが付かない、かなり強い色弱なんです。それで、その反動と

言う訳でもないのでしょうが、紫色は凄く美しく感じますし、うまく捉えることが出来るんです。だから、綺麗だと思う花は殆んど紫色なんです。ここまでは、義経とは直接関係がないように思われますが、実は大きな関わりがあるのです」

「……」

「……」

「神様って、時々凄く意地悪なことをなさるのね。絵の才能を与えたあなたに、そんな大変な障害も負わせるなんて。でも、あなたって本当に強い人だって思う」

と、麗華が呟くように言った。

「それでね、ある日、通りがかった花屋さんの店先で綺麗な紫色の花を見たんです。義経三部作は全てその出会いから始まったと思っています。で、その花を買った時に名前を竜胆だと教えられても最初は、それをそのまま描こうとしていたんです。どう描いたら一番美しく表現できるのか、その方法は、いまでも変わらないのですが、じーっと見詰めていて、一時間ぐらい経った時、ある考えが閃いたんです。『この竜胆の花と笹の葉を組み合わせたら、笹竜胆で、源義経の家紋になるんじゃないか』と。それからが大変でした。今みたいにコンテを持ったらあまり自分が意識しなくても勝手に描けると言う状態ではなかったので、いざ義経の鎧兜を描こうとしても、形も色も、飾だって判らないんです。でも描きたいという気持ちはどんどん昂まってくる。それで、図書館に行き、いろんな人が研究した資料をコピーしたり、借りてきたりして、とにかく読みました。そうして頭の中にそのイメージが浮かんでくるのを待って、やっと最初の『義経幻想』が出来たんです」

「大変な作業なんですね」

と、竹之内。

「正直に言いますと、大変は大変でもやっぱり、大変楽しいことなんです。もちろん、出来上がりが自分の持ったイメージに近ければの話しですが」

「イメージ通りにはいかないのですか？」
昌幸の話しに圧倒されたのか、山口が少し擦れた声で聞いた。
「それは、絵でも歌でも同じだと思いますが、イメージは頭の中でどんどん膨らんでいくんですね、際限なく膨らんでいく。それを自分の感性や技術が追いかけていく、でも、それは永久に追いつけないんですね。だからこそ、死ぬまで自分のイメージを求めて描き続けることが出来る。私はそう思っています」
「そうよね。追いついた時が死ぬ時って思ってたけど、そうじゃないのね。その考えってよく判るわ」
麗華がしみじみとした口調で言った。
「何か難しい話になってしまいましたが、二作目の『旅立ち（北へ……）』も結構苦労したんです。これは、雪が降っている中尊寺の門前で、じっと佇む義経の後ろ姿を描こうと思ったのです。しかし、鎧兜の後ろ側って見たことないんですね。どうなっているのか、これは考えて解るものじゃないですよ。で、私がとった方法は、百貨店の人形売り場に行って、五月人形の後ろ側に回り込んで見たんです。でも、その場でスケッチするわけにもいかないし、写真を撮らせても貰えない。仕方ないから、頭の中のフィルムに焼き付けられるまで、それと、店員さんたちに怪しまれるまで、何ヶ所かの百貨店を何日かをかけて廻りました。色んな形の人形を見て、自分が義経だったらこれだと思える後ろ姿が出来た時、初めてコンテを持ちました。後は、一気に、それこそ寝る間も惜しんで描きました。三作目の『訣別』は、前の二作に較べると短時間で狙いと言うか、描くテーマが見付かったので楽でした。義経が子供の頃、牛若丸の時代に修行した鞍馬寺の門前で、北へ逃れる時、少年時代を偲んでじっと佇んでいる様子をイメージしたんです。工夫したのは、一枚の絵の中に時間を表す方法だけでした。これはご覧になれば解りやすいのですが、門前一帯雪景色の中に、シルエットだけの義経を立たせたんです。その部分だけは夏の情景を描くことで、自分としては長い時間の経過を表したつもりなんです」

「……二階堂さんって、凄い人なんですね。絵を見せて頂いても、そんな感じは受けるんですが、こうして一つ一つの作品の説明をお聞きすると、改めて大変な人だなと思います」
感心したように竹之内が言った。
「あなたって、こんな苦労を楽しさに変えてしまってるんだから、やっぱり、生まれつきの絵描きさんなのね」
「私、今日、何か凄くいい勉強をしたような気がするわ」
いままで黙って話に耳を傾けていた涼子がぽつりと言った。
「二階堂さんと竹之内さんの先程の、吾妻鏡なんかのお話しをお聞きしていると、実に面白いですね。小説家と画家って、まるで関係ないと思っていましたけど、創作する時のベースみたいなものは共通した部分があるんですね」
と、山口。
「そうですよ。本などには挿絵があるでしょう。あれで生活している絵描きさんもいるんですよ」
「ああ、そうか」
山口は妙な所で感心している。
「ところで、ロンドンとパリは如何でした？」
と、竹之内。
「ただ一言、最高でした。と言うしかありません。自分がこんなに歓迎されていいんだろうか、これはきっと夢なんだと何度も思いました」
「わたしも、今でも信じられない気持ちなんです。女王陛下にも、フォスター首相にもお会いして、こんなに幸せでいいのかなって思っていました。これから先、一生忘れられないことばかりでした」
「へーっ、女王様にお会いしたの？　緊張したでしょ」
「最初はね。でも、昌幸さんもわたしも途中からは落ち着いて、きちんと応対したわ」
「あんたひ弱そうに見えて、いざとなると結構度胸あるもんね。で、どうだった？　どんな人だった？」

「温かかったわ。お話ししてて、凄く聡明な方だなって思ったけれど、それ以上に、穏やかで温かい人だって強く感じたわ」
「そうですね。私が一番感じたのは、大きさでした。もちろん、肉体的なことではなく、心の、懐の大きさでした。温かさも感じましたよ」
「フォスター首相も魅力的な人だったわね」
「そうそう、一国の首相なんだから、もっと強烈な個性みたいなものがあるかと思っていたのですが、お会いしてみて、本当にスマートで、魅力一杯の人だったね。私がイメージしていた英国紳士そのものと言う感じの人でした」
「ロンドンやパリの街はどうだった？」
「そうですね、それは一年か二年待ってください。私なりの印象を絵にして発表しますから」
「それは楽しみですね。二階堂さんにとって初めて描かれる外国の風景画ですか。大いに期待が持てますね」

所用があるという竹之内と山口は、三時半の新幹線に乗りたいと、慌しく帰った。
「ロンドンにね、純が来たのよ。昌幸さんの絵が見たいって」
「へーっ、一人で？」
「この人と絵や将来のことなんかお話しして、凄く喜んでたわ」
「彼も画家を志しているんだったよね」
「そうなのよ。今年中にはニューヨークに留学したいって言ってた。それとね、パリから帰る途中、寄り道して、ケニアに行ったのよ。純に聞いたんだけど、隆がナイロビの近くにいるって判ったから会いに行ったの。嬉しかったわ」
「隆君て、いまナイロビにいるの？　どうして？」
「ほら、青年海外協力隊ってあるじゃない、それで、むこうで学校の先生をしてた。生き生きしてて、頼もしかったわ」
「……すごいね、あんたの子供達って」

「僕も感心しているんです。世界を見詰めている、それも、きちんと自分の目的意識を持って。この人の素晴らしいＤＮＡを見事に受け継いでいるなと思いましたね」
「……」
「そうね、私もそう思うわ」
「わたしにはよくわからないわ。わたしのＤＮＡなんて、そんなに素晴らしいって思っていないもの」
「ところで麗華、今度、私もこっちに引っ越してこようと思ってるんだけど……」
「えっ、本当？」
麗華の顔に笑みが広がった。
「顧問先の大日鋼管って言う会社の本社が福島に移転するのよ。それで、関連会社も何社か一緒に引っ越すことになったのよ。この際だから、私もこっちに来てもいいかなって考えてるんだけど、あんた、どう思う？」
「何言ってるのよ。わたしは勿論大賛成よ。福島と仙台なんて、新幹線に乗れば二十五分しかかからないのよ。絶対引っ越してくるべきよ。ね、あなたもそう思うでしょ」
「そうだね、僕も大歓迎します。涼子さんの仕事に差し障りがなければですが」
「それは、今私が関わっている顧問先の殆んどは大日鋼管系列だから、問題ないんです。山口君もそろそろ独立したいって言ってたから、東京に残る何社かは彼に任せてもいいと思ってるし、ただね、私って生まれてからこの歳になるまで、あの土地離れたことがないんだよね。それで、何か踏ん切りがつかなくて」
「そんなことなら迷うことないわよ。この近くでいい所見付けて、ちゃんと面倒見てあげるから、安心して引っ越していらっしゃい」
いつもの麗華と涼子の立場がまるで逆転したような会話を、昌幸は笑いを堪えて聞いていた。
「……。よし、決めた。こっちに来るわ。あんたがいいと思った

ら勝手に決めちゃって構わないから、探しておいて」
やっと本来の涼子に戻ったらしく、さすがに最後の決断は早かった。
「わかった。わたしの持ってる情報網を総動員して探すわ。期待してて」

三ヵ月後、二人の家から車で十分ほどのところに引っ越してきた涼子を囲んで、世話になった人たちへの感謝を込めたパーティが、まだ荷物が雑然と置かれた新居で開かれた。総勢二十三人の賑やかな集いであった。
「お引越しおめでとうございます。あ、おめでとうでいいんですよね」
「そうですよ。夜逃げならどうかと思いますが、この場合は、おめでとうでいいんですよ」
「まー、何はともあれ、おめでとうございます」
部屋の中では訳の判らない、愉快な会話が飛び交っていた。
普段時間に正確な昌幸と麗華にしては珍しく、まだ姿がない。
「五分ほど過ぎていますので、そろそろ始めましょうか」
幹事役の山口が言った時、扉を開け、二人が飛び込んできた。
「ごめんなさい、遅くなりました。車のエンジンがかからなくって……」
会場が水を打ったように静まり返った。後ろにいた昌幸も含め、二十二人の目は、その時確かに見た。麗華は、強烈なオーラに包まれていた。室内がふわっと温かな光に満たされ明るくなった。これほどのものは、一緒に暮らしている昌幸でもかつて経験したことはなかった。幻想の世界に導かれるような心地よい温かさ、そして、光り輝く存在感。確かに麗華は輝いていた。
「バッテリーがあがってしまって、本当にすみません」
怪訝そうな表情を浮かべながら麗華は詫びた。
「彼女のオーラのパワーって、ますます強くなっている」

茫然とした気分の中で昌幸は思った。
涼子でさえ、何かに憑かれたように、ただ見詰めていた。
「ねえ、どうしたの？　何かあったの？」
麗華は不思議そうに聞いた。
「いや、何でもないよ。気にしなくていいよ」
擦れそうになる声で昌幸は答えた。

「初対面の方もおいでですので、まず、自己紹介といきますか。手短にお願いします。もちろん奥様方はご主人が紹介して差し上げても結構ですよ」
「じゃ、まず私から、石田と言います。ちょっと古風ですが、石田真之介です。まあ、親がつけたんで文句も言えませんが、名前の割にはまだ若くて、三十八歳になりました。東北中央新聞の文化部にいます。秋月さんとは、十年程前取材させて頂いた時、大ファンになりまして、以来、熱心な信者です。これは家内の幸子です。年齢は、内緒です」
「ありがとうございました。申し遅れましたが、今日の幹事役をさせて頂きます、山口健司です。東京で弁護士をしています。宜しくお願いします。私も三ヶ月ほど前、秋月さんに初めてお目にかかり、その魅力の虜になりました。しかしながら、今日は私の尊敬する涼子先輩の歓迎と、皆様への感謝の集いですので、そこのところ、よろしくお願いします。では、続いてお願いします」
「えー、仙台中央病院の高畑広昭です。外科です。これは一応、妻の茜です。あ、私の歳ですが、四十七歳です。付け加えさせて頂きますと、秋月さんがデビューした頃から、勝手に後援会を作りまして、これまた勝手に、その会長をしています」
こうして、多岐に亘る職種を持った、様々な世代の人達が、麗華の大ファンという共通項を携えて集まっていた。
「この度は大変お世話になりました。ありがとうございます。三枝涼子です。これまでは、北東京弁護士会に所属していましたが、

こちらに参りまして、仙台中央弁護士会に所属します。宜しくお願いします。専門は民事ですが、ご依頼次第では刑事事件も扱っていこうと考えています。なにかお困りのことがありましたら、遠慮なくご連絡ください。特に今日おいで頂いた皆様は裕福な方々とお見受けしましたので、しっかり相談料なり、弁護料を頂戴したいと思います。この点も併せてよろしくお願いします」

「一応簡単に自己紹介だけさせて頂きます。二階堂昌幸です。妻の麗華です。よろしくお願いします。またこの度は、私どもの大切な友人であり、恩人でもある三枝涼子さんのことで色々お骨折り頂き、ありがとうございました。こころより感謝申し上げます」

「こっちに引っ越してきてよかったと思ってるわ。麗華、ありがとう。気持ちのいい人ばかりね」

「そうよ。お付き合いが永い人、まだ最近知り合った人、色々なんだけど、どうして？って思うほどいい方ばかりよ。涼子も安心してお付き合いできるわよ」

「僕は、出会いって本当に大切だと思う。それも、いい出会いを望むのじゃなく、自分が相手の人に、いい人と出会ったと思われるようになりたいね。難しいことのようだけど、この人を見ていると、そんなに大変なことじゃないと思えて来るんだ」

「そうね、私も、この子とは付き合いが永過ぎて、あまり意識しないんだけど、あらためて考えると、ものすごく色んなことで影響受けてるよ。弁護士なんかやってると、人や事案を疑ってかかることって多いんだよね。相談者や依頼人を先ず信じなきゃ何も始められないと思うんだけど、疑心暗鬼に陥って自分が嫌になることがある。そんな時、この子に会うと、本当に不思議なんだけど、自分が信じたんだったら、最後まで全てを信じてみようって気持ちになってくる。そうすると、そんな相手は絶対に裏切らないんだ。この子は何もそんな事言わないけれど、そういう気持ちが湧いてくる。どうしてなんだろうと思って、真剣に考えた時、ふと浮かんだのは、

この子の考え、言葉、行動、どれも本当に素直なんだ、雑念がないって事だった。いつ会っても、真正面から柔らかく心を包み込んでくれる。そうすると自分も信じられないぐらい素直な気持ちになるんですね。もし、私が人間として少しでも成長してるとしたら、やっぱり、この子のお蔭なんだと凄く感謝しているんです」

涼子は、しみじみとした口調で言った。

「……わたしにはよくわからない。わたしって、涼子との出会いがなかったら、とてもこんな幸せをつかむことって出来なかったって思ってるし、芸能界にいた時だって、いつも支えてもらってた。これからだって……」

「僕から見れば、お互いが凄く影響しあっていて、とても僕なんかが入り込めない領域みたいなものを感じることがありますよ。これこそ、最高の出会いなんでしょうね」

「秋月さん、みなさんがどうしてもあなたの歌が聞きたいと言っているのですが、お願いできませんか？」

と、山口が申し訳なさそうに言った。

「唄ってよ、私も聞きたいわ。あんたの近くに引っ越すんだからと思って、オーディオ装置にだけはお金を掛けたのよ。最近は唄ってないの？」

「いえ、週に一度はボランティアで。それに、カルチャーセンターで歌唱指導もしているので。きみ、いいよね。僕も聞かせて欲しいな」

「……はい、じゃ、思い切って」

静まり返った室内に、哀調を帯びたイントロが流れる。麗華は眼を閉じている。まるでスポットライトを浴びたように、麗華の姿が輝きを増して浮き上がって見えた。

透き通って、心に滲み込むような素晴らしい歌声が、聞き入る人の魂を揺さぶる。ピンと張りつめて、全く濁りのない高音域、温か

くゆったりとした中音域、膨らみ、優しく包み込むような低音域。全てが独特の震えるようなビブラートに乗って、心地よさと穏やかさを感じさせていた。室内にいる人はみなその歌声に酔っていた。陶酔していた。ファンを自認する人たちにしてみれば、何度も聞いたことがある筈の曲に、初めて聞くような新鮮さを感じ、その歌唱に身を委ねていた。

続けて二曲を歌い終えた麗華の表情は、やや上気していた。室内はまだ余韻の中にあった。しばらくして、激しい拍手に揺れた。

「イギリスの時もそう思ったけれど、最近の歌声は益々透明感が増して綺麗になっている。不思議だなー」

昌幸は、思わず呟いていた。

「やっぱりダメね。唄ってる時足が震えて止まらなかったわ」

「素晴らしかったよ。ほら、見てご覧、高畑さんの奥さん、北村さんの奥さん、あれ、山口君も目頭拭っている。みんなきみの歌声に感動しているんだよ」

「……」

「二階堂さん、少しご相談があるのですが、明日にでもお宅に伺ってよろしいですか？」

「どうぞいらっしゃってください。明日なら麗華も一日中家にいますから。で、高畑さんお一人ですか？」

「いえ、大和田さんと石田さんも一緒に参ります。じゃ、午後三時頃にお伺いしますのでよろしくお願いします」

翌日、約束どおり高畑たちが訪れた。大和田夫人の梢さんも同行していた。

「ご相談と申しますのは……」

挨拶を終えると、大和田が話し始めた。彼は、仙台と盛岡で大きな薬局を何店舗か経営している。

「……お話しすることはあまり得意じゃないので、整理しながら

お話しします」
「どうぞ、ゆっくりお話しください。時間は充分ありますから」
「ええ、ありがとうございます。……私どもの子供で、健一っていうのがいるんですが、いま、高校三年生です。それの同級生に山中君、たしか、山中高明って言ったかな、ご相談と言うのはこの子の事から始まったんです。彼は、素人の私達が言うのもなんですが、大変に絵がうまいんです。本人も好きなんですね。それで、小さい頃から絵描きになりたいという夢を持っていたんです。高校を出たら、フランスに留学して本格的に絵の勉強をしたいと言っていたんです。ところが、去年の秋、父親が交通事故で急に亡くなってしまいまして、もともと母親は小さい頃に病気で亡くしていますので、全くの一人ぼっちになってしまいました。こうなると留学なんて話しじゃなくなる。本人も諦めていたんです。で、これを最後の思い出にしようと描いた作品を高校の先生が、岩手県美術コンクールに出したんです。そうしたら、それが特選に選ばれてしまって、また本人や先生がぐらっときたんです。でも、どうしようもない。そんな話をうちの息子が聞きまして『親父、なんとかならないだろうか？』ときた訳なんです。うちだってそんな余裕はないし、さてどうしたものかと思案していた時に、ふと思ったんです。一人じゃどうすることも出来なくても、大勢で力を出し合えば何とかなるんじゃないか。そういうことで、昔から仲のいい高畑さんに相談に行ったんです。それで、話し合っているうちに、じゃ、新聞社の石田さんにも、長円寺の榊田さん、教育委員会の寺前さんと言う具合に環が拡がっていきまして、結局きのう三枝さんのお宅に集まった殆んどの人に話しが伝わりました。そんあことから一度みんなが集まって相談しようと言うことになったんです。それで、最初の話が絵の事でもあるので、それなら二階堂さんにも知恵を貸して頂けたらと考えたんですが、どうでしょうか」
「……勿論私なんかの知恵でよろしければいくらでも協力させて頂きますが、その山中君の場合は、早く動いてあげないと間に合わ

ないんじゃないですか？」
「はい、彼の場合は、今現在協力を表明している人が四十五人いますので、その人たちが毎月幾らかずつ出し合って援助していこうと話しているんです」
と、高畑。
「僕は、この際、ＮＰＯ法人でも、社会福祉法人でもいいから立ち上げて、みなさんの善意を活かしていきたいと考えています。もちろん、国や民間の育英資金などもありますが、実際に取材してみますと、その対象に該当しないケースって結構あるんですね。だから、既存の育英資金のお世話になれる場合はそれでいいと思うのですが、そうじゃない場合にこそ出番があると思っています」
石田は静かに言った。
「私も、何かしたいと思っていましたので、喜んで協力させて頂きます。で、いつ頃皆さんが集まられるのですか？」
「こういう事は早い方がいいと思いますので、来月の初め頃を予定しています。ご連絡しますので是非おいでになってください」
「……涼子も言っていたけれど、本当に素晴らしい人たちが集まってるのね。今のお話しをお聞きして、イギリスであなたが言ってた、感謝を込めて何かをさせて欲しいって事、これかなって思ったわ。わたしも精一杯協力させて頂きます」
「でも、考えてみれば不思議な友達の環ですね。様々な業種の、色んな年代の人たちが、ただ一点、善意と言う求心力で集まっている」
「いえ、その前に、秋月さんの熱烈なファンという共通項があるんです」
「……」
「二ヶ月ほど前、皆さんが集まった時に話題になったのですが、どの人も不思議に思っていた事があるんです」
石田が言った。
「どんな事ですか？　私もお聞きしたいですね」

と、昌幸。

「……それは、自分の人間性についてなんです。ふと気付くことがあるんですね。私なんか子供の頃は喧嘩に明け暮れていたんです。社会人になってからも早く楽がしたくて嫌な仕事は人に押し付けたり、同僚と上司の前では態度も言葉遣いも全然違っていたり、そんなことは気にもしなかったんです。いま思っても嫌な奴だったんです。それが、いつの頃からかハッキリしないんですが変わってきたんです。自分でも気付くような変化なんですね。数少ない友人からも『人柄が変わったよ。何かあったの？』と言われたり、この人はいい人だなーと思うような新しい友人が出来たり、書かせて貰う記事も変わってきたみたいなんです。それでこの前、高畑さんや寺前さん達にお会いした時その事をお話ししたんです。そうしたらみなさん同じような経験をお持ちなんです。驚きましたよ。榊田さんなんか、自分はとても住職なんか勤まるとは思ってもみなかった。それどころか、勘当される寸前だったとおっしゃっていました」

「私は、大学の心理学教室に古い友人がいますので、思い切ってそのことを聞いてみたんです。そうしたら、彼は、解らないよ。特に君のように複雑怪奇な心の動きをする奴の心理など掴みようがないと笑っていたのですが、その時、彼が洩らした一言が凄く気になりましてね、ああ、それは『人は悪い方には簡単に変わるが、良い方に変わる事は大変に難しいんだ。誰か君の周りに物凄い影響力を持った人がいるんじゃないか』と言う事だったんですが。それで、一生懸命考えてみてある仮説を思いついたんです。その後は皆さんに色々お聞きして、やっと結論らしきものを得たんです」

と、高畑は言った。

「なんですか？　それは」

大和田と石田が畳み掛けるように言う。昌幸にだけは何となく心当たりがあるようだ。

「二階堂さんにはお判りのようですね。それは、秋月さんなんです。私が初めて歌声を聞いて、初めてお会い出来て、と言ってもコ

ンサートで遠くから眺めただけなんですが、こうして、直接お話しが出来るようになった。自分の心の中の変化が見事に一致するんです。お聞きしてみると、友人の柳田さんも、西条さんも同じなんです」

「そんなこと……」

「秋月さん、あなたはご自分ではそんな人間だとは思っておられないでしょう。でも、私達にとってはそういう存在なんです。その事はご主人が一番よくご存知ですよね」

「そうですね。確かにおっしゃるような強烈な影響力は持っていますね。私自身は比較的穏やかな性格だと思っているのですが、それでも、この人と再会するまでは、人を憎んだり、嫌ったり、喧嘩したり、結構色々あったんです。でも、再会した頃から何かが変わってきたのです。そういう人がいてもいいんじゃないか。これが彼の個性なんだろうな。そんな事大したことじゃないと、この人以外の人は冷静に客観的に見られるようになってきた。これは、自分にとって凄く大きな変化でした。絵も、考え方も、それこそ総てについて豊かになったと思います。窮屈さや圧迫を感じるような強い影響力なんて事ではなく、心地よくて温かくて、知らないうちに自分が変わっていた。そんな特別の力を与えられた人なんだといまでは理解しています」

「……全く同感ですね」

「……わたしの存在が影響を与えたとか、そんな事意識したこともないわ。……でも、もし本当にわたしにそんな力があるとしたら、お友達の人みんなが優しい人に変わって頂けるように努力します。と言ったって、わたし自身何がどうなのか解らないんですよ。困ったわ」

「いいよ、きみは今のままでいいと思うよ」

12、善意の環

仙台金華園ホテルに七十八人が集まった。
夫人同伴の人も多い。異業種交流会の様相を呈したこの集まりも、実体は、本人の知らない間に作られた麗華の後援会であった。ここ数年歌手活動をしていない彼女にとって、面映く、よく理解できない後援会ではあった。
「一応座長を勤めさせて頂きます、高畑です。と申しましても、堅苦しい会議の形はとりたくありませんので、何かご意見のございます方は自由に発言して頂いて構いません。フリートーキングと言うことで宜しくお願い申し上げます。内容につきましては、ご存知の通り、家庭の事情や不測の事態で進学、留学の希望を断念せざるを得ない有望な若者をどのように支援していくかと言うことです。既に、石田さんから、ＮＰＯ法人か社会福祉法人を立ち上げたらどうかというご意見が寄せられていますが、皆さんの忌憚のないご意見が頂ければありがたいと思います」
「最初にこの話を持ち込んだ大和田です。私にはＮＰＯと社会福祉法人の違いなんかはよく解らないんですが、こういう活動はずっと長く続けていく事が一番大事なことだと思っています」
「そうですよね、三年や五年で立ち行かなくなってしまっては、制度を利用している人に迷惑が掛かってしまうね」
「他の育英資金とか奨学金などとの住み分けっていいますか、対象外となった人をどう救い上げていくか、これも問題ですね」
「あとは、援助する資金をどうやって調達していくか、それと、卒業した人や留学を終えた人からきちんと回収できるのか、これも大きな問題ですね」
それぞれ思い付いた事を自由に発言している。さすがに高い教養と社会的地位を身につけた人たちである、次第に建設的な意見が多く出されるようになっていった。
「初めてお目にかかる方も見えますので、自己紹介させて頂きます。三枝涼子です。宜しくお願いします。いろんなご意見をお聞きして大変心強く感じています。どんな組織がいいのか、未来永劫に

亘って運営していくのにはどうしたらいいのか、今取り敢えず考えなくてはならない事はこの二点ではないかと思います。これは、詳しい方、知識をお持ちの方にお願いして決めていくことではないでしょうか。あと、細かなことはそれが出来てから、またこうして皆さんの知恵をお借りしていけば、きっといい制度が出来ていくと思っています」

「わたしも涼子さんと同じ思いです。このお話しの発端になった、人に対する皆様の温かい心がこうした会合になったと、心の底から喜んでいます。確かに、どうやって山中君のような人達を助けていったらいいのか、回収は出来るのか、大きな問題のように見えます。でも、それはそんなに難しいことではないと思います。大切なことは信じてあげる事じゃないでしょうか。相手を、自分達を信じていれば決して裏切られるような事なんてないと思います。一時的には戻ってこないと感じられる事があるかもしれません。でも、信じてさえいればきっと解ってくれると思います。それに、その制度を利用した人たちによって、もっともっと沢山の善意が受け継がれていくと思うんです」

麗華の言葉は、温かな風となって、会場にいる人たちの心に沁みこんでいった。

昌幸は、真っ白なキャンバスを前に、既に一時間も瞑想していた。二十号のそれにはまだ何も描かれていない。最近の彼の制作風景である。すぐ隣で麗華はじっと彼の顔を見詰めている。彼女の顔は生き生きとして楽しそうだ。事実、彼女は彼が絵に打ち込む姿を見ていることが楽しくてたまらないようだ。

やがて、二時間が経過しようとする頃、フッと小さく息を吐くと、構想が纏まったのであろう、コンテを取った。滑るように走る。三十分ほどでキャンバスにイギリスの古城が浮かび上がった。手前にバレリーナと思える華麗な後ろ姿が見える。全体は、湖から湧き出る朝靄がうっすらと描かれている。彼は、コンテを置くと丁寧に指

先を拭った。麗華が肩越しに覗き込む。その顔に輝きが増す。彼は、そっと手を後に回すと彼女の手を握った。
「いつから見ていたの？」
「あなたが瞑想に入った最初からよ。ちょっと待ってて、いまコーヒー煎れて来るわ。モカ？　それともキリマンジャロにする？」
「いいよ、僕がするよ」
「何言ってるのよ。わたしがするって。この前高畑さんから頂いたクッキーでいい？」
「ありがとう。じゃ、一緒に煎れよう」
二人は連れ立ってダイニングへ。呆れるほどの仲のよさであった。ここ仙台で一緒に暮らすようになって三年が過ぎていた。

13、トラウマ

「ねえ、昨日涼子がね、顧問先の社長さんに、お父様の肖像画を描いて欲しいんだけどって相談されたらしいの。あなた引き受ける？」
「……ごめん、断ってくれないかな。……まだ話していなかったけど、思い切って説明するよ」
「何？　どうしたのよ。何かあったの？」
「少し長くなるけど、きみにはきちんと話すよ」
言うと、昌幸は頭の中を整理するように目を閉じた。
「僕には自分の力ではどうにもならないトラウマがあるんだ。それはね……」
……それは、昌幸が小学校三年生の時のことであった。
図工の時間に専任の教師の指導の下、教室で「母の日」にちなんで、「私のお母さん」というテーマで、それぞれ母親の絵を描いていた。もともと絵が好きだった昌幸は一生懸命描いていた。
一人一人が描く様子を見ていた教師が怪訝な表情で昌幸の絵を覗き込んだ。

塗られている顔の色が確かにおかしい。
「あれーっ、へんだなー。君の絵の色は変だぞ」
思わず口から出た言葉は静かな教室に響き渡った。
時をおかず、
「変だ、変だ」
と、合唱が沸き起こった。教師は失態に気付き鎮めようとしたがしばらくの間その合唱は治まらなかった。これが俗に言う「いじめ」になった。
授業中も休み時間も担任の眼を盗んで「変人、変人」と囁きかけて逃げていく。しかし、昌幸は黙って耐え続けた。誰にも訴えたり打ち明けたりはしなかった。
やがて一年が過ぎようとする頃、貝の様にひたすら耐え続ける昌幸の態度に面白みを失ったのか、この「いじめ」は自然に沈静化して行った。暴力的にリーダーシップを取ったり、根本的に嗜虐的な子がいなかった事、昌幸が無抵抗を貫き通した事で、虐める側に一種の飽きが生まれた事が一年ほどで「いじめ」が治まった原因であろう。
しかし、当時の昌幸にはそんなことは解らないまま、心に大きなキズを残した。
これは転校によって癒されたかに見えたが、心の奥深くでトラウマになっていた。同時にこの出来事の発端になった、母の顔の絵に使った色が、昌幸が色覚の異常に気付いた始めであった。
以来、昌幸は人の顔が描けなくなった。そして、それに関連してであろうか、顔を覚えることが極端に苦手になった。
油絵を始めてから何度か人物画に取り組むチャンスは訪れた。しかし、顔の部分に来ると筆が止まった。どんなに自分を励まし無理矢理のようにして筆を握ってみても、筆は進まなかった。こうして、人を描くことを諦めた。どうしても描く時は後ろ姿かシルエットだけにした。

絵を描き始めて二十五年ほど経った頃、昌幸は銀座のあるギャラリーで個展を開催していた。会期の半分が経過し、あと三日となった日の深夜、午前二時頃の事である。昌幸の部屋を目付きの鋭い二人の男が訪れた。

何度も鳴らされる呼び鈴に起こされて、朦朧とした意識のままドアを開けると、彼らは黒い手帳を示し、

「新宿中央警察署の古谷です。こちらは佐々木です」

と名乗り、署への同行を求めた。事情も解らず、まだ夢の中にいる昌幸が同意すると、覆面パトカーに押し込まれた。その頃になって漸く自分の身の上に降りかかった事態の重大さに気がつき、

「どうしたんですか？　何があったのですか？」

と問いかけるが彼らは一切応えない。やがて新宿中央署に到着するといきなり殺風景な取調室に連れ込まれた。ここで初めて捜査主任と思われる係官から事情の説明を受けることが出来た。

……前夜十時ごろ、新宿のあるスタンドバーに一人の男が入ってきた。カウンターに椅子が七脚というその小さな店に客はいなかった。

手持ち無沙汰の経営者・ママに、男は徐に名刺を差し出した。それによると、自分は絵描きで、今個展を開催している最中だと言った。初めて立ち寄った店で名刺を出す客も珍しいが、話術は巧みだったようだ。それに、絵画についての知識も結構豊富だった。一時間ほど呑んだ十一時ごろ、ママが店の外にある化粧室から戻ると男の姿が消えていた。不安を覚えて背後の棚の鏡で隠してある引き出しを検めると、ハンドバッグがなくなっていた。カウンターの上には先程の「二階堂昌幸」の名刺がポツンと残されていた。

驚いたママは即座に百十番通報した。

駈け付けた警察官が事情を聞くと、犯人は五十歳前後で身長約百八十センチほどとかなり大柄だったと言う。人相はあまり特徴のない容貌であったようである。

これらの事から早速名刺の主の元を訪れたという訳である。しか

し、小柄な昌幸は、疑いからは解かれたが、手渡した名刺について聞きたいということであった。
新しく制作し、この個展から使い始めた名刺は、まだ二十枚ほどしか使っていなかった。
記憶を探った昌幸の脳裏に、ツイードのジャケットを着た大柄な一人の男の姿が浮かび上がった。しかし、顔つきはどうしても思い出せない。どんなに記憶の底を浚ってみても形を成しては来ない。当然のことである。トラウマによって人の顔を覚えることは、昌幸にとって最も苦手とする事だから。
「モンタージュの作成に協力して頂けませんか？」
残念ながら顔は全く覚えていない、と言う昌幸に、信じられない表情を浮かべた捜査主任の一言が突き刺さった。
「えーっ？　あんた絵描きさんでしょう？　普通絵描きさんと言うのは上手く特徴を掴むんじゃないんですか？」
早朝四時半頃、やっと開放されて警察署を出る昌幸は、激しい疲労の中、自信喪失と強烈な自己嫌悪の嵐に翻弄されていた。
まるで夢遊病者のような足取りで、漸く部屋に辿りついた彼の心の中で、警察官の放った不用意な言葉が木霊していた。
作品に対する評価が徐々に高くなり、ある程度自信らしきものも芽生えてきた最近ではあまり意識することなく心の深層に押し込めていた、色覚障害を原因とするトラウマの重さ、大きさが改めて心の表面に浮かび上がってくる。
創作活動や絵画の世界そのものまで総て否定されるような無力さを強く感じる。
彼の絵画は繊細であった。そして、彼の心もまた絵そのものであった。

それから二週間経った頃、新宿のスナックで女性経営者が殺害されると言う事件が発生した。
捜査の結果、現場に残されていた指紋から、先のスタンドバーの

窃盗事件と同一犯と断定された。その報道は、落ち込んでいた昌幸の心に追い討ちを掛けた。
「あの時、モンタージュ作成に協力できていたらこの女性は殺害されずに済んだのだろうか」
それは決して答えの得られない不毛の問い掛けであった。昌幸は筆を握ることが出来なくなった。
彼の意識は、光さえも飲み込んでしまうブラックホールに引き寄せられるように、どんどん真っ暗な世界に向かう。

そんな彼を、更に非常なニュースが襲った。
金沢市と福井市で同じ犯人の手により、相次いでスナックの女性経営者が殺害された。
もう限界であった。犯人の顔を覚えることが出来なかった自分の不甲斐なさを責め続けた。眠る事も、何をする事も出来なくなった。食事すら満足に摂れなくなっていた。
魂を抜き取られた夢遊病者のように、彼は街を彷徨った。知らないうちに駅のホームに立っていた。列車が接近してくる。引き込まれるようにふらふらと前に出た。付近にいた人たちが危ないと思わず目を閉じた時、うつろで何も写していない昌幸の視界の中に壁に貼られた一枚のポスターが飛び込んできた。そこに、麗華がいた。ある化粧品会社のポスターであった。優しい微笑を浮かべた麗華の眼が一瞬厳しく引き締まると強烈な光を放った。それは、昌幸を現実に引き戻した。
「お願い、生きて！」
麗華の叫びは、直接昌幸の脳に響いた。
目の前を轟音を響かせて特急列車が駆け抜けて行った。
ホームから生還して六日後、連続殺人の犯人として、大越忠が逮捕された。新聞やテレビで顔写真を見ても全く思い出せない事が無性に悔しかった。
昌幸が立ち直るまでには、一年の歳月が必要であった。

長い述懐は終わった。麗華は溢れる涙を拭おうともしない。
「……そんな辛いことがあったなんて」
「でも、確かにきみが助けてくれたんだ。いまでも僕はそう信じている。あの時、きみの笑顔があの場所になかったら、きみの『お願い、生きて！』という声が聞えなかったら、僕はいまこうしてここにいることはなかったと思う。そう考えると、何か運命的なものを感じるよ」
「それって、その出来事って、秋の事じゃなかった？　わたし、凄く胸騒ぎがして落ち着かない日々が続いた事があったのよ。きっとあの時だったんだわ。ごめんね、もっと早く助けて上げられなくて」
「いいよ、結局はきみに助けられたのだから、本当に感謝している。何か変だけど、あの時はありがとう。きみは命の恩人でもあるんだ。それにね、きみにはずっと前にも一度助けられているんだよ」
昌幸は初めて大自然を描いた時の事。あの『穂高遠望』を描いた時の苦しかった出来事を麗華に詳しく話した。
「あの時はレコード・ジャケットのきみの瞳が強烈に光ったのも、叫び声が聞えたのも自分の潜在意識が見せたり聞かせたりしたと思っていた。でも、列車に跳ね飛ばされそうになった時の事を考えると、あれもきみの力だったと思えるようになったんだ。僕が絵を捨てないでここまでやってこれたのも、きみの大きな力や深い愛のお蔭だと今では信じている」
「……」
「僕が大変な苦境に立ったり、大事な岐路に差し掛かって進路を誤ってしまいそうな時、二度もきみには救われているんだ。だから、ありがとう何て言葉だけでは言い表せないほど感謝しているんだよ」
「でも、その結果として、いまわたしがこんなに幸せなんだから、きっとわたし自身を助けたことにもなるのよね」
「あ、そんな考え方もできるんだね」

「そうよ。お互い様なのよ。でも、そんな大変なトラウマがあなたに人の絵を描けないようにしているのね。それでもあなたの絵には前を向いた人がいないのね。そんな大変なこと考えてもみなかったわ。……辛い事思い出させてごめんなさい。涼子にはきちんとお断りしておくわ」

コンテのラインが縦横に走っている。曲線も多い。柔らかなカーブ、鋭く指に突き刺さりそうな直線。それぞれが自由気ままに自己主張しているように見える。しかし、そのどれもが、やがて、大切な構成要素として意思統一され、色彩のマントを纏うと命の輝きを持って生きてくる。

キャンバスをそっと持ち上げると、昌幸は、丁寧にフィキサチーフを拭きかけた。これは、コンテによって絵の具が濁らない様にするためだ。ここで、また小さく息を吐く。さあ、いよいよ描画に取り掛かる。この瞬間、どきどきと心臓の動きが速くなる。これは、何年絵を続けようが、何百点制作しようが変わらない。間違いなく自分が描くのだが、どんな作品が姿を現わすのか、期待に胸の昂まりを感じるのだと理解している。特に、ここ数年の作品は自分が描いている気がしないから尚更である。

パレットを所定の位置に置くと、彼の手は迷わず、一本のチューブを取り上げる。どのチューブか、色彩も、濃度も意識してはいない。総てを手の動きに任せている。すぐ隣で麗華が楽しそうに笑顔で見詰めている。手が勝手に調合したペインティングオイルを筆先に含ませると、パレットに出された絵の具目掛けて一直線に走る。適度に混ぜ合わせると、今度はキャンバスを目指す。リズミカルでユーモラスな動きに、麗華の口から思わず、「くっ、くっ」と笑いをこらえる声が聞える。こうして、少しずつ筆が動いて、幻想に満ちた彼の世界が徐々にその姿を現わしていく。大きさによって異なるが、全体の印象が判るまで、早くても二週間は掛かる。

遠くにぼんやりとした山並みが見える。左寄りにイギリス北部、エジンバラ地方にあるような古い城跡が繊細なタッチで描かれている。やや右手前にバレリーナが一人、今にも聞えてきそうな音楽に乗って軽やかに舞っている。柔らかで美しいその姿は、強く印象に残る。しかし、しなやかに腕を掲げた彼女は、斜め後ろを向き、その顔は見えない。全体は、湧き上がる朝靄が、濃く薄く、刻々と変化している。

一月近くをかけて、二十号の作品は完成した。タイトルはまだ決まっていない。

作品を前に、二人は、午後のコーヒーを愉しんでいる。かすかにブルーマウンティンの芳醇な薫りが漂っている。

「……いいわねー。何時間でもずっと見ていたいわ……」

「僕はこの作品を描いている間、いつも頭の中に、きみの『朝の祈り』って歌が流れていた」

「わたしも大好きな歌の一つよ。ねえ、わたしがもっと力強く唄ったら、あのバレリーナ、こっちを向いてくれるかなー？」

「きみの歌声ならそんな事ぐらい出来るかも知れないね。やってみてよ。もしそうなったら、僕の絵に初めて正面を向いた人物が登場する事になるね」

「そうなるといいわね。でもね、わたしの歌声じゃ無理だけど、あなたに人の顔が描ける時が必ず来るって信じてるのよ。だから、すごく楽しみにして待っている。その日が自然にやって来るって思って」

「ありがとう。早くその時がくるといいな。何か僕も楽しみになってきた」

「そうよ。トラネコならいるけど、トラウマなんていないもの」

「……きみって」

アトリエに笑い声があった。

高畑、大和田、石田たちの精力的な活動で、当面は絵画、彫刻、

音楽、舞踊など、主に芸術を対象にした新しい留学や教育の援助団体が設立された。昌幸と麗華も発起人にその名前を連ねていた。これからは、その運営と税法上の問題などのために、社会福祉法人資格取得に向けて涼子達が力を注ぐ事になる。

１４、悲報

仙台で二人が暮らすようになって五年の歳月が流れた。満ち足りた、穏やかな愛の日々であった。

二人が、完成したばかりの作品『残照』を前に、満足感の中で午後のコーヒーを楽しんでいた時、柔らかな日差しを突き破るように電話が鳴った。

「いいよ、僕が出る」

言うと昌幸は受話器を手にした。それは、麗華の元夫、高沢からであった。

「きみにだよ。高沢さんから」

いぶかしげな表情を浮かべながら、麗華は、

「あ、はい、わたしです。えっ……」

後は言葉になっていない。昌幸がはじめて見る彼女の取り乱した姿であった。ただ涙がとめどなく流れ落ちている。

事情は解らないが、何か重大な、それもよくない報せであることだけは察することが出来る。昌幸は麗華が取り落とした受話器を拾い上げた。それはまだ繋がっていた。

「二階堂です。何があったのでしょうか？」

「あ、申し訳ありません。実は、純が亡くなりまして、はい、留学先のニューヨークで。詳しいことは解りませんが、爆弾テロに巻き込まれたようです。私はすぐ向こうに行きますが、その前に連絡だけと思いまして」

「えっ、淳君が……。私たちも参ります。はい、じゃ、向こうで」

まだ麗華は泣きじゃくっている。優しく肩に手を置いた彼の胸に

顔を埋めて。
「行こう。すぐに行こう」
「何かの間違いよ。自分の目で見るまでは、わたし、絶対信じない」
麗華は泣きながら言った。

辛くて長い時間を過ごした二人の姿が、ニューヨーク・ケネディ空港にあった。麗華は機中でも全くハンカチが手離せなかった。昌幸には慰める言葉も見付けられなかった。ただじっと寄り添い、手を握り続けることしか出来なかった。
大使館職員の案内で、一つの棺の前に立った。周りはまだ騒然としている。
そこには、純の死という、無情な、しかし厳然とした事実があった。
麗華は高沢とともに辛い確認をした。そこは、昌幸には立ち入ることの出来ない領域であった。
机の上に、靴、バッグ、腕時計など遺品が並べられていた。昌幸は、その中から血に染まった一冊のスケッチブックを手に取った。一ページ一ページが信じられないほど重い。丁寧な筆致でニューヨークの街のあちこちが描かれている。貿易センタービルを遠景で捉えたもの、エンパイアステートビルを象徴的に見上げたもの、二十枚ほどに純の苦心の筆跡があった。
昌幸の脳裏に、ロンドンでの純の笑顔が浮かんできた。久しぶりに母親に会って、喜びとテレが同居した複雑な顔、ピカソの絵を前にして興奮している顔、街のスケッチでアングルを決めるのに苦心している顔、人の顔を覚えることが苦手な昌幸であったが、不思議に思えるほど純の顔はどれもはっきり思い出すことが出来た。
翌日、彼の滞在していたアパートを訪れた。数点の油絵が残されていた。その殆んどが写実的な具象画だった。昌幸の言葉を忠実に守ってくれていたようだった。そんな彼の素直な心が嬉しかった。

そして、いじらしく思えた。ふいに昌幸の頬を涙が伝い落ちた。我慢できなくなって描いたのであろうか、二点の抽象画があった。近い将来の彼の力量を予感させる作品であった。もっと描いて欲しかった。描かせてやりたかったと昌幸は痛切に思った。イーゼルに制作中のキャンバスが架かっていた。自由の女神が持つトーチの色が眼に突き刺さってくる。せめてこの作品だけでも完成させてやりたかった。どうしようもない悔しさが湧き上がって来た。

昌幸に寄り添っていた麗華が、小さく呟いた。

「……ごめんね、助けて上げられなくて……」

机上に置かれたフォトスタンドの中で、麗華は優しく微笑んでいた。

帰国して三ヶ月ほどが経過した。麗華は、徐々に立ち直ってきたように見えた。もちろん、純の死という思い現実は永久に彼女の心から消えることはないのであろうが。

「今度、そうだな、来週辺り、京都へ行こうか。二、三日ゆっくり古都の散歩を楽しもうよ。僕は、カメラは持っていこうと思っているけど、鉛筆もスケッチブックも持たないで、ずーっと腕を組んで歩きたいと思っているんだけど、どうかなー」

彼女の返事は、感謝を込めた熱いキスだった。

（続く）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5624t/

幻象画　（?）

2011年10月8日23時33分発行